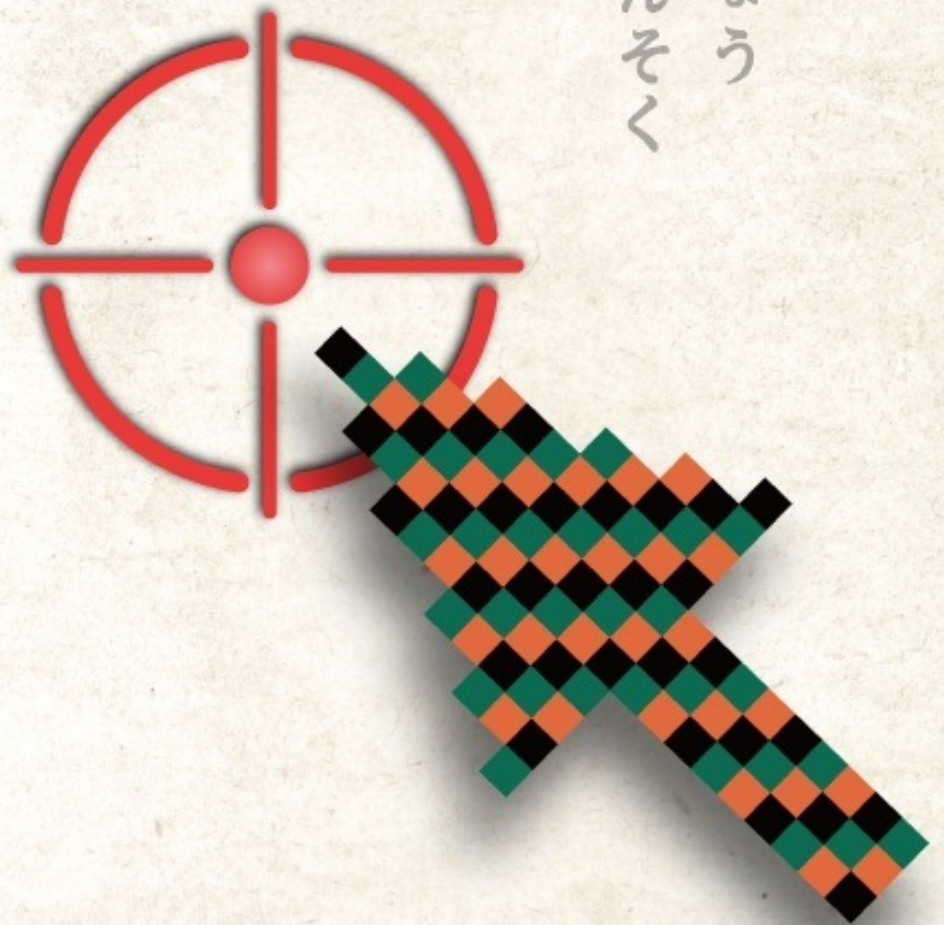


池袋

演芸場

定点観測

いけぶくろ
えんげいじょう
ていてんかんそく



長井好弘

池袋定点観測まえがき

いざともに、寄席の世界へ
～少し長い前口上と「定点観測」の手引き

「電子書籍の形で、初心者からマニアまで、すべての落語好きを対象にした本を書きませんか？ テーマやスタイルは、ご自由に。何をどんなふうにも書いてもかまいませんよ」東京・銀座八丁目にある「高級なドトールコーヒー」。本書の執筆依頼は、随分気楽な調子だった。ただ、中身は気楽どころではない。「ラーメンから餃子まで」ならともかく、「初心者からマニアまで」満足させる落語本なんて、なまじな覚悟で書けるものではない。そういう本は、書くよりも読むほうが幸せである。

普通なら丁寧に断りするところだが、僕はちょっと迷った。書き手にとって「全部おまかせ」というのは、かなり魅力的な条件なのだ。その時、僕の心の揺れを見透かしたように、誰かが耳元で囁いたのである。

「とっておきの手があるじゃないか。ほら、寄席の定点観測だよ」
あれは落語の神様か、それとも悪魔だったのか。僕は「定点観測」という言葉の持つ、懐かしくも蠱惑的な響きに抗しきれず、首を縦にふった。

「何でもいいというなら、一つ、やってみたいことがあるのですが・・・」

「寄席の定点観測」は、落語好きなら誰でも一度は夢想する、魅惑的かつ限りなく無謀な試みだ。

寄席は、通常10日ごとの興行となる。1か月は、上席（かみせき、1日～10日）、中席（11日～20日）、下席（21日～30日）の3つに分けられ、10日ごとに出演者が入れ替わる。上中下の各席には、それぞれ昼の部、夜の部があるから、1か月で6番組。1年分なら70以上の番組だ。この70以上の番組を1回ずつ、全て見てしまおうという途方もない作業が、「寄席の定点観測」なのである。

身も心も寄席に浸りきる、夢のような1年間だ。しかし、我々真っ当な（？）社会人には、仕事、付き合い、飲み食い、買い物等々の日常生活がある。月に数回（どころではないが）、コンスタントに寄席通いをするのは、想像以上にキツイ作業だ。

ここで告白しなければならない。僕は「定点観測」の経験者である。
1999年から2000年にかけて新宿末広亭に1年間通い、そこで見たこと聞いたこと、食べたこと寝たことトイレに行ったこと、ついでに寄席に通いすぎて途中、急性心筋梗塞に倒れたこと（死ぬかと思った！）までを、「新宿末広亭『春夏秋冬』定点観測」（アスペクト刊）という本にまとめた。

「俺は寄席を征服したぞ！」

「観測」を終えたときの達成感と満足感は今でも忘れられない。だが、もう疲れ果てた。二度と「定点観測」はしないと心に誓ったものだ。

ところが、あれから11年の月日が流れ、僕は今、新宿末広亭から池袋演芸場へとターゲットを変えて、再び「定点観測」に再挑戦することになった。

理由は二つある。

一つ目は、その後の落語界の動きに関わるものだ。

僕は「末広亭」の本のあとがきに、こんな趣旨のことを書いた。

「おそらく今後、落語や寄席のブームが起ることはないだろう。だからこそ僕は、定点観測を通して、寄席の今を見届けようとしたのだ」

昭和の名人が次々とこの世を去った。後を継ぐ平成の落語家たちを見れば、魅力的な人材には事欠かないものの、飛びぬけたスターがいない。寄席の観客も年々減少している。「定点観測」でそんな現実を知った僕がそう思ったとしても、仕方のないことだろう。

だが、現実には想定外が付きものだ。2005年頃、大型ではないが、旋風のような落語ブームが突如、巻き起こったのである。

落語をテーマにしたテレビドラマ「タイガー&ドラゴン」のヒット、春風亭小朝、立川志の輔、笑福亭鶴瓶ら人気者が集う「大銀座落語祭」の開幕、石原軍団も加わった林家こぶ平改め「九代目林家正蔵」の襲名記念の華やかなお練り、柳家喬太郎、林家たい平ら若手実力派の台頭と世代交代一一。同じ時期に起こった数々の追い風がひとつになって、寄席やホール、地域の落語会に客が押し寄せたのである。

もう一つは、落語の世界が変わったように、僕自身も変わったということだ。

かつての定点観測は、何よりも僕個人のための試みだった。1年間、一つの寄席を見続けることに何の意味があるのか。ただ、それを知るために僕は末広亭に通い続けた。

そして、「定点観測」を世に出したことで、僕の生活は変化した。それまで道楽でしかなかった寄席演芸が、僕の仕事のかなりの部分を占めるようになったのである。

この十数年で、僕は10冊以上の落語本を書き、演芸に関する連載を何本か持ち、古典芸能をテーマに講演をす

るようになった。

ここまで落語や寄席の世界に関わってしまった僕が、再び「寄席の定点観測」に挑戦する。その暴挙に意味があるとすれば、この文章の読者から、1人でも多くの落語好き、寄席好きが生まれる、そのお手伝いができることではないだろうか。



[大きな地図で見る](#)

開演時間が近づいてきた。僕と一緒に寄席の木戸をくぐり、僕目や耳を通して、高座の芸、客席の空気、売店のにぎわい、トイレの匂い（！）など、寄席のすべてを体験してほしい。

何も難しいことをするわけではない。読者諸氏は、「10月上席・昼の部」「11月中席・夜の部」などと題された僕のレポートを読むだけだ。

本文は、何も手加減をしていない。僕同様、落語に淫している人が読んでも楽しんでいただけるはずだ。

まだちょっと難しいなあという方、我こそは落語初心者だと胸を張る方々は、ガイド代わりの注釈を読んで欲しい。筆者としてはかなり力を入れて書いているので、もしかしたら本文よりも面白いかもしれない。

こうして「定点観測」を読み進むうちに、何人かの賢明な読者、あるいは落語に淫し出した読者諸氏は、おそらく疑似体験だけでは物足りなくなるに違いない。

そうになったら、しめたものだ。読者はもう、寄席に行くしかない。自分の足で寄席へでかけ、「長井というヤツの定点観測が本当かどうか」を自身の目で確認することになるはずだ。

そうなるに決まっている。そうなる、いいなあ。そうなってほしいという願いを込めて、筆を進めよう。

さあ、ともに、池袋演芸場へ。

